

高 2 難関大 国語



出典：『貞観政要』／福井大学・改

書き下し文

貞観の初、太宗從容として侍臣に謂ひて曰く、周の武王紂の乱を平げ、以て天下を有つ。秦の始皇周の衰に乗じ、遂に六国を呑む。其の天下を得たるは殊ならざるに、何ぞ祚運の長短は、此のごとく之れ相懸たるやと。尚書左僕射蕭瑀進みて曰く、紂無道を為し、天下之に苦しむ。故に八百の諸侯、期せずして会せり。周室微なりと雖も、六国罪無し。秦氏専ら智力に任じて諸侯を蚕食せり。平定するは同じと雖も、人情は則ち異なれりと。上曰く、然らず。周既に殷に克ち、務めて仁義を弘む。秦既に志を得て、専ら詐力に任ぜり。但だ之を取ることに異なる有るのみに非ず、抑も亦之を守ることも同じからず。祚の修短、意ふに茲に在らんと。

現代語訳

貞観年間の初めのころ、(唐の)太宗がゆったりと落ち着いた様子で(周りの)臣下の者たちに問いかけて言うには、「周の武王は(殷末の)紂王の暴虐を鎮め(「暴政を行った殷王朝を滅ぼし」、それによって(長く)天下を保った(「天下の王者として君臨した」)。秦の始皇帝は(その)周王朝の衰えに乗じて、結局六国を併呑(「征服)した。(周と秦の)二国が(それぞれ)天下を手に入れたという点では異なることがないのに、どうして国の福運(「命運)の長短はこのように互いに違いがあるのか」と。尚書左僕射の蕭瑀が進み出て言うには、「(殷の)紂王は非道を行い、天下の諸国はそのために苦しみました。だからすべての諸侯がはからずも(反殷王朝という点で)一致したのです(「殷王朝に戦を挑んだ辺境の小国であった周に味方したのです」)。(その後天下を取った)周王朝が(衰えて)微力となっても、(秦以外の)六国(などの諸国)に特に罪があったわけではありません。(しかし)秦はもっぱら知恵と暴力を用いて(罪のない)六国(などの諸国)の領地を少しずつ侵略してゆきました。(天下を)平定したという点では同じといっても、(周

と秦それぞれに対する) 人々の気持ちはしたがって違っていました」と。(それを聞いていた) 太宗が言うには、「そうではない(「それだけではない」)。周は殷に勝った後、務めて仁義を(天下に)ひろめた(「仁義の徳で天下を治めた」)。(それにひきかえ) 秦は思いを遂げる(「望み通り天下を手に入れる」と、その後はもっぱら詐欺的手法と暴力に頼つ(て天下を治め)た。(周と秦では) ただ単に天下を取るときに違いがあったのみならず、そもそも天下を守る(「天下を治める」)方法でも違いがあったのだ。国の福運の長短は、(私が)考えるにその点にあるのだろう」と。

解答

問1 しんのしこうしゅうのおとろえにじょうじ、ついになりっこくをのむ。

問2 ② ことならず (ことならざるに)

④ させず (させずして)

⑤ しからず

問3 どうして国の福運の長短は、長く続いた周とすぐに滅びた秦のようにそれぞれ違ったのか。〔41字・解答例〕

問4 天下(1行目)

問5 周は仁義という徳でもって天下を治めたのに対し、秦は詐欺と暴力でもって天下に圧政を敷いたという手法の違い。

〔52字・解答例〕

書き下し文

後数日、偶々都城の南に至り、復た往きて之を尋ぬ。其の中に哭声有るを聞き、門を叩きて之を問ふ。老父有り、出でて曰く、「君崔護に非ずや（君崔護に非ざるか）」と。曰く、「是れなり」と。又哭して曰く、「君吾が女を殺せり」と。護驚起し、答ふる所を知る。老父曰く、「吾が女笄年にして書を知り、未だ人に適かず。去年より以来、常に恍惚として失ふ所有がごとし。此日之と出づ。帰るに及んで、左扉に字有るを見る。之を読み門に入りて病む。遂に食を絶つこと数日にして死せり。吾れ老いたり。此の女の嫁がざりし所以の者は、將に君子を求めて以て吾が身を託さんとすればなり。今不幸にして死す。君之を殺すに非ざるを得んや」と。又特大いに哭す。崔も亦感慟し、入りて之に哭せんと請ふ。尚ほ嚴然として牀に在り。崔其の首を挙げ、其の股に枕せしめ、哭して祝して曰く、「某は斯に在り、某は斯に在り」と。須臾にして目を開き、半日にして復た活たり。父大いに喜び、遂に女を以て之に帰がしむ。

現代語訳

数日後、(崔護は) たまたま都の南に行くことがあり、再び例の家を尋ねて行った。家の中から悲しみ嘆く声が聞こえてきたので、(崔護は) 門を叩いてその訳を尋ねた。老人が出てきて言った、「あなたは崔護ではないか」と。(崔護は) 答えた、「そうです」と。(その老人は) さらに泣きながら言った、「あなたは私の娘を殺した」と。崔護はびっくりして、なんと答えてよいかわからなかった。老人は言った、「私の娘は十五歳で読み書きを覚えましたが、まだ嫁いではありません。去年からずっと、いつもぼんやりとして我を忘れてるようでした。何日前、娘と外出しました。帰ってみると、門の左の扉に字が書きつけてあるのを見つけました。(娘は) それを読んで門の中に入ると病気になるました。そのまま何日も何も食わずに死んでしまいました。私は年を取りました。娘が嫁がなかった理由は、立派な男を見つけて(結婚し)、この私の面倒をみてもらおうとしたからです。今(娘は) 不幸にも死んでしまいました。あなたが娘を殺したのではないということがあり得ますか(いえあり得ません)」と。(老父は) さらにとりわけ大声で泣いた。

崔護もまた心を動かし、家に入って弔問をさせてくれるよう頼んだ。(娘は)そのまま(生きているときと同じようにして) おごそかに寝台に横たわっていた。崔護は娘の頭を持ち上げ、自分の腿の上へのせ、泣きながら祈って言った、「私はここにいるよ。私はここにいるよ」と。少したつと(娘は)目を開き、半日して再び生き返った。父親はたいそう喜んで娘を崔護と結婚させた。

解答

- 問1 ① ㊦ たまたま ② ㊧ なし ③ ㊨ と ④ ㊩ ゆえん (の)

問2 (1) 「書き下し文」……きみさいごにあらざるか。「きみさいごにあらざるか」でも可。

〔現代語訳〕……あなたは崔護ではないか。

(2) 「書き下し文」……きみこれをころすにあらざるをえんや(と)。

〔現代語訳〕……あなたが娘を殺していないということがあり得るでしょうか、あり得ません。

問3

- (a) 未^ツ適^ガ人^ニ
(b) 遂^ニ以^テ女^ヲ婦^レ之^ニ

解説

問1

① 「偶」は「仲間」「同類」「ならば・そろふ」「あふ・あはす」「たぐふ」などの意味をもつ字だが、本文では「至」という述語動詞の直前に位置し、副詞として機能している。その場合は「たまたま」という意味である。

② 「莫」は本文のように体言句(この場合は「知所答」)から返って読むときは「無」と同じで「なし」と読む。

③ 「与」には「あたふ」「あづかる」「くみす」などという動詞としての意味、「〜と・〜とともに」の前置詞としての意味、「〜か」という文末の疑問の助辞としての意味があるが、この場合は「之」という補語とともに述語動詞「出」の前に倒置された形になっているので、前置詞「〜と(〜とともに)」と訓読する。

④ 「所以」は原因・理由や手段・方法などを表す語。読みは熟字訓で「ゆゑん」。

問2

(1) 述語動詞は「非」で、構文上「君」が主語、「崔護」が補語である。したがって「君非崔護」の部分は「君(は)崔護に非ず」となるが、最後に「耶」があるのがポイント。「耶」は「乎」「邪」などと同様、文末に用いられている場合は「くや」「くか」と訓読する疑問の辞。したがって設問部分は「君(は)崔護に非ず」を疑問文にした形である。疑問の語は反語と解釈する必要がある場合もあるが、ここでは老父が崔護と会って最初に語りかけた言葉である点から、反語と考えるわけにはいかない。「や」「か」のどちらを用いるかについては、日本語表現として自然な方を用いる、という他はない。この場合は、結論としてどちらを用いてもよい。ただし、助動詞「ず」に接続する際、終助詞「や」は終止形接続、「か」は連体形接続である点に注意。「君(は)最後に非ずや」あるいは「君(は)最後に非ざるか」となる。

(2) 設問部分が会話文の一部であることに注意。会話文は全体で理解するのが原則である。この会話文は崔護が尋ねていった家の「老父」が語っている。長い会話文だが、要は自分の娘が死んだ経緯を語っているわけで、その直接のきっかけが、崔護が門の扉に書き残していった詩であること、去年娘と崔護が出会って以来、娘の様子がおかしかったこと、さらにこの老父が崔護の顔を見るなり「君殺吾女(君吾が女を殺せり)」「(本文2行目)」と言っていること、以上をふまえた上で設問部分を見れば、何を言っているのかは簡単である。後はどのように訓読するかで、またしても文末に「耶」があるが、その前に、設問部分全体の述語動詞が「得」であることを確認する。すると「非君殺之」の部分(訓読は返り点にしたがって普通に読めば「君(の)之を殺すに非ず」は述語動詞「得」に対する目的語・補語として機能していることになり、「非」は連体形「非ざる」で体言句として訓読する必要がある。したがって最後の「耶」を除いた部分は「君(の)之を殺すに非ざるを得」となり、あとは疑問・反語のいずれであるかの判断と、「之」の指す内容を考える必要があるが、老父の言う「君」が崔護のことであり、すでに触れたように本文2行目で彼は「崔護が自分の娘を殺した」と言っているわけだから、「之」が指すのは娘、そして「耶」は反語ということになる。反語なので、「耶」は「くんや」「くん」は助動詞「む」で、未然形接続なので、これが接続する述語動詞「得」は未然形の「え」となる)の形で訓読する。

問3

(a) 「未」が再読文字、「適」がそれに対応する述語動詞、「人」が述語動詞「適」に対する目的語・補語であることからえるのは

難しくないだろう。したがって「未」「適」の後にそれぞれレ点を補うこととなるが、問題は「適」をどのような意味(訓)の動詞と判断するかである。ポイントは設問部分が老父の会話文の中にあり、主語が女(娘)であること。同じ会話文の後半に「此女所以不嫁者(此の女の嫁がざりし所以の者は)」と、「女」が「嫁」いでいない理由を説明している点から、「適」は「嫁ぐ・結婚する」の意で用いられていることがわかる。したがって「未だ人に適かず」という訓読となる。なお、「適」には動詞として「ゆく」「とつぐ」「かなふ」という意味があり、副詞としては「たまたま」「ただ」などの意味となることもある多義語。この場合、「ゆく」という訓を用いて「未だ人に適かず」としてもよい。

(b) 設問文に「婦」が「嫁」と同じ、とあるので、「以」が「女」という目的語を述語の前に倒置する前置詞、「婦」が「とつぐ」で述語動詞、「之」が補語であることは容易にわかるだろう。「遂」は述語動詞の前に位置しているわけだから、普通に副詞として「つひに」と読む。したがって返り点は「以」と「婦」との後にそれぞれレ点を施せばよい。訓読は「遂に女を以て之に婦ぐ」となりそうに思えるが、この設問ではそのように答を書く(送りがなを施す)と零点である。この部分の主語は老父であり、「女を以て」とある以上、「婦ぐ」相手である「之」は崔護のこととしか考えられない。つまりこのままでは「父が(女を連れて・女を理由に)崔護と結婚した」ことになってしまう。実際には女が崔護と結婚するはずである。ということは、構文上の主語(老父)と実質動作主(女)とが別人ということ、そのような場合は意味上受身か使役のどちらかである。このことに気づけば、「遂に女を以て之に婦がしむ」と、使役の助動詞「しむ」を補って訓読できるだろう。

《補充問題》

現代語訳

問1 (a) その身に楽しいことがあることと、その心に憂えがないことと、どちらがよいか。(心に憂えがないほうがよいだろう)

(b) (略) ※左記「解答」参照のこと。

(c) たとえ人が自分を背くことがあったとしても、自分が人を背いてはいけない。

(d) (略) ※左記「解答」参照のこと。

問2 (略) ※テキスト参照のこと。

問3 (略) ※左記「解答」参照のこと。

解答

問1 (a) 其の身に楽しみ有るよりは、其の心に憂へ無きに孰若れぞ。

(b) 子供を理解するのは父親が一番である。

(c) 寧ろ人(の)我を負くとも、我(の)人を負く(こと)勿かれ。

(d) 死んだ馬でさえもこれを買う、まして生きている者(馬)であればなおさらこれを買うはずだ。

問2 (1) 臣死すら且つ避けず、扈酒安くんぞ辞するに足らん。

(2) 故郷何ぞ独り長安に在るのみならんや。

(3) 徒に益無き(の)みに非ず、而も又之を害す。

問3

庸人尚羞^{スラホツ}之、況^{シヤ}於^{イテラ}将相^ニ乎。

平凡な人間でさえ、このことを恥じる。まして大臣や将軍のような高貴な方であればなおさらこのことを恥じるはずである。

【問題】(演習)

出典：岸田秀『擬人論の復権』の冒頭部 / 専修大学・法A・経営・商・00年

文章略解

古代人の世界観は、すべてが人間的な動機や営為によって支配されるという擬人論的世界観であった。しかし近代に至り自然科学が隆盛すると擬人論は幼稚な見方とされ、逆にすべては物理化学的現象であるとする擬物論が真理と見なされるようになった。擬物論的世界観においては、無機物から始まり有機的自然、生命現象までが物理化学現象であるとされ、ついには人間の精神さえもそれ自体としては実在せず、単に身体的・生理的過程との相関関係で出現・消滅するに過ぎぬものとされた。そしていずれは森羅万象がすべての科学を統合した物理学の統一理論によって説明されるはずだった。たしかに諸科学はめざましく進歩し擬物論の全面的勝利は間近かと思われた。しかし、神経症や精神病等の精神疾患には身体的基盤がないことが次第に明白になった。開業医だったフロイドは、精神疾患の症状には意味があることを発見した。意味はそれを了解する他者の存在を予定しており決して物には還元できない。神経症の症状を見ると、物のレベルでの変化が精神的原因で生ずることを認めざるを得ない。こうして擬物論的世界観には限界があることが明らかとなり、今また擬人論が復権しつつある。

解答

- 問1 X ③ Y ① 問2 ④ 問3 ④ 問4 ④ 問5 ① 問6 ④

問7 嘔吐は身体的基盤とは別の神経症の症状であり擬物論的見方では解明不能だということ。(40字・解答例)

出典：山折哲雄『日本人の二つの死生観』の一節 / 専修大学・商・会計A、文・国文B・心理A・00年

文章略解

万葉人にとって、死後は魂の行方だけが関心事であり遺体は魂の脱け殻にすぎず、魂優位の感覚である霊肉二元の死生観が万葉古代人の基本的な考え方であった。仏教が伝播すると、平安時代から鎌倉時代にかけて仏教の瞑想から心の探究が始まり、からだは心は一体のものだとする思想が定着した。これは心優位の感覚であり身心一元の死生観だといえる。この考え方が完成したのが中世だった。以後日本人は、霊肉二元と身心一元の二つの異質の死生観を抱え込むことになった。それはいわば自己分裂の意識とみなすこともできる。脳死・臓器移植の問題が浮上してくるたび我々の態度が一定しなかったのもこのためかもしれない。しかしこの二つの死生観は、千年近くの伝統をもつ感覚でいわば我々の文化的遺伝子である。遺伝子DNAの存在が科学で証明されても一向に実感のわからない私が、感覚でしかないはずの文化的遺伝子の存在は実感できるのは不思議な矛盾である。

解答

問1 ③ 問2 Y② Z②

問3 ③ 問4 ⑤

問5 ① 問6 ①

問7 科学的に証明されたDNAの存在は実感できず、文化的遺伝子の感覚は実感できること。(40字・解答例)

問1 文学史的な知識問題。

万葉集の部立（＝和歌集や漢詩文集などの編纂で行う作品の内容による分類）は、相聞・挽歌・雑歌であるが、後の古今集以降の勅撰集は四季（春・夏・秋・冬）と恋を中心にして賀・離別・哀傷・羈旅などによっている。死者を悼む歌「挽歌」とは、もともと「中国で、葬送の際、柩車を挽く者がうたった歌」の意。

問2 四字熟語の知識問題。

「身体と **Y** 即 **Z** 離の関係を保つ心の領域」という単位で選択肢を吟味するが、知識が無いと苦しい。四字熟語は使用頻度が高い割には、全部でせいぜい300～400語程度なので、全部覚えてしまった方が早いだろう。ちなみに大型の国語辞典で見ても **Y** 即 **Z** 離」という構造の熟語は「不即不离（＝二つのものが、つきもせず離れもしない関係を保つこと）」と「相即不离（＝二つのものが一体となって切り離すことができないさま）」の二つしか存在しない。

問3 趣旨判別の設問。

設問が「合っていないものはどれか」としている点に注意する。要するに他の四つは本文の考え方に合致している訳である。適宜部分に区切って可否を判定し、迷うものは必ず本文の該当箇所と照合して決めることが大切である。「万葉・古代人の基本的な考え方」については、本文の第一段落～第三段落に述べてある。

①「∴医師には決められない」は、本文の「∴それが呪師（医師）の専管事項でなかったことだけはたしかである」（11～12行目）と合致している。②の「魂を大切にすることが∴なにより重要」は、「∴死んだあとは魂の行方だけが重大な関心事であり」（2行目）と合致する。④「死後の魂が肉体に戻ってくるかもしれない」も「からだを抜け出した魂がふたたび戻ってきて、遺体が息を吹き返すかもしれない」（6～7行目）に、⑤「死後に魂が山や海をさまよっている」も「死者の魂が山や海に漂っていく」（4行目）とそれぞれ合致している。

一方、③「死後も魂と肉体は切り離すことができない」は明らかに「死んだあとは魂の行方だけが重大な関心事であり、そのあとの遺体は魂の脱け殻にすぎなかった」（2～3行目）という冒頭の記述や後の「霊肉二元の死生観」（13行目）と矛盾している。

正解は③。

問4 内容判別の設問。

一見「世阿弥」の言葉を問う知識問題にも見えるが、前後の「身体と心が一体と……という意味だろう。……世阿弥にしても『B』』といっている……。ついでに言えば、身心一如も心技体もみんなそう……からだとは一体のものだ……。心優位の感覚である……とあるのを見ていくと、「身体と心が一体・心優位」という内容を述べた選択肢を選べばよいとわかる。ここから、正解は⑤「心内にあれば／色外に現る」(「何かに心に隠し事があって、それを外に出すまいとすればするほど、動作や表情に自然に現れる)だとわかる。世阿弥の『風姿花伝』の言葉だが、原典は中国儒家の経典『礼記』。

参考までに他の選択肢だが、①「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」は『空也上人絵詞伝』中の歌の言葉、②「心頭滅却すれば火もまた涼し」は、禅僧快川かいたが織田勢に火をかけられた時、端坐焼死しようとする際に発した偈げと伝え、③「水は方円の器に従う」は鎌倉時代の児童教育書『実語教』にある言葉で、いずれも世阿弥の言葉ではない。④「初心忘るべからず」は世阿弥の『花鏡』にある「当流に、万能一徳の一句あり。初心忘るべからず」とある最も著名な言葉だが、趣旨が合わない。

問5 趣旨判別の設問。

問3と同様に、「中世人」の死生観については第五段落～第七段落に述べてある。要点を抜粋すると、「……心の安定こそ人間を正常な状態にみちびく(18行目)……。……からだとは一体のものだとする思想(25行目)……。……心優位の感覚(26行目)……。その心は体と切っても切り離せない関係性(26行目)……。身心一元の死生観(26行目)……。……」などと述べ、問3で見た「万葉人」とは逆の姿勢であるとわかる。要するに「身体と心は一体・心身一元・心優位」が「中世人の死生観」。ここから、正解は①「心と身体は一体のものだと考えていたから」。

②③④の「魂」は、いずれも中世には「心」にとつて代わられた古代万葉の感覚なので除外される。同様に⑤も「二元論的」が古代万葉のものである上に「道德観」も「死生観」と置き換えられている。

問6 比喩説明と内容判別の設問。

「われわれの」は「日本人の」だがすべての選択肢が共通である。そこで「腰が定まらなかった」を吟味するが、これは「腰砕け」や「腰が弱い」などに通ずる「物事に対処する際の態度や姿勢が一貫しなかった」という意味の慣用表現である。仮に知識がなくとも段落内の関係表現を吟味すれば正解に近づくことができる。「…日本列島に住む人びとは、…霊肉二元と身心二元の二つの異質の死生観を…抱え込む…それはあるいは…自己分裂の意識…」われわれの腰が定まらなかったのもそのため…。」という文脈を確認できれば、相容れない「霊肉二元と身心二元の二つの異質の死生観」で「自己分裂」状態となったことが「腰が定まらなかった」原因だと解釈できる。ここから、正解は①「日本人は一元論と二元論の間で意識の分裂を起こしている」。③「日本人は二つの死生観の二重構造に悩んでいる」も近いが、①の正確な指摘に劣る。⑤も「分裂」はよいのだが、肝心の対立する異質の「死生観」に触れていない。

問7 指示語の内容説明問題。

設問の問い方から、まず文末表現を「…こと。」と仮決めしておくときよい。次いで「このように／矛盾」と分けて考える。指示語「このように」が指す内容を端的にまとめると、直前部分の「…霊肉二元、身心一元の死生観は、…感覚でもあった(36～37行目)…。…文化的遺伝子なのだ。…霊肉二元の神道感覚が生き残って…それとも身心一元の仏教感覚が(37～39行目)…。…文化的遺伝子などと口走ってしまったけれども、じつは私はその本来のDNAなるものを実感したことが一度もない(40～41行目)。…その科学的に証明されているはずのDNAを、私の生命体は実感できない…。むしろ、…文化的遺伝子の方を実感できる(41～43行目)…。わが生命のEこのように矛盾した性格…。」という範囲できちんと押さえ、「四十字以内」という短めの文字数制限を念頭に使用すべき語句を吟味していく。以上から「矛盾(＝物事の道理が一貫していないこと。つじつまが合わないこと)」の内容を整理すると、

① 科学的に証明されていて本来の遺伝子である「DNA」については ……むしろ実感したことが一度もない。

ところが、

② 神道感覚にしろ仏教感覚にしろ、感覚に過ぎない「文化的遺伝子」については ……なぜか実感できる。

という構図にまとめることができる。少ない文字数の中でもきちんと主題＝「DNA」対「文化的遺伝子」、キーワード＝「科学的証明」対「感覚」、そして「実感」を確保して、当初の予定通り「…こと。」の文末表現にする。

【問題】(演習)

出典：竹田青嗣『哲学ってなんだ』／愛知学院大学

文章略解

文学は人間が営んでいる文化的ゲームの一つであって、その独自の方法と規則に則するには才能が必要である。また、文学の基本は書き手の個性や内面の表現である。しかし、文学は必ずしも希望を与えてくれるだけのものではない。文学は、絶望している人間に問いを投げかけてその人間の生を支える。この力を必要とする切実さこそが文学における「モラル」であり、青年期の私を救ったのも、文学にこの「モラル」というものがあつたからだ。

解答

問1 (a) 〓 7 (b) 〓 4 (c) 〓 4 問2 2 問3 3

問4 B 〓 7 D 〓 8 問5 5 問6 1 問7 5

問8 3 問9 1 問10 深い絶望のあることを教える〔13字〕(9行目)

問11 理由(9行目) 問12 と規則をもっている。〔10字〕(17行目)

文章略解

幼児期の記憶に根ざす「自分が自分であるというだけで愛されたいという欲望」が挫折するところに、青年期の「自己アイデンティティを希求する欲望」は生まれる。「私」の価値は、社会的合意と他者による認定によって与えられ、それは自分の長所が愛され短所が疎まれる毀誉褒貶の原則の始まりを意味する。ところが恋愛はそのような原則を飛び越え、「自分が自分であるというだけで愛される」可能性を回復する可能性をもたらす特権的な優位性を有する。

解答

- 問1 (ア)Ⅱ奉仕 (イ)Ⅱ暗黙 (ウ)Ⅱ一挙 (エ)Ⅱ固着 (オ)Ⅱ純粹

問2 社会的合意として構成されている人間の価値を「私」が有していると他者が認定し、それを「私」が受け入れることで得られる。
〔58字・解答例〕

問3 自分が自分であるというだけで愛されるのではなく、長所が愛され、短所が愛されないという毀誉褒貶の原則に則った過酷な現実。
〔59字・解答例〕

問4 アイデンティティゲームが、自分が自分であるというだけで愛されたいという欲望の挫折の上に成立しているのに対し、恋愛は一挙にその欲望を実現する可能性をもたらすから。
〔80字・解答例〕

問5 「どんな他人からも愛される」ような価値を自分の中に作り上げようとする〔34字〕(38～39行目)

本問のような哲学論を苦手とする生徒は多い。それは何故かという点、用いられるポキヤブラリーが抽象的・観念的すぎて、実感を伴ったある種の「手応え」を感じづらいためだ。もちろん筆者の側もそれは充分自覚しているはずで、それゆえ「同義・類義表現」を多用する。抽象的・観念的ポキヤブラリーの「臃おぼろな像を、「同義・類義表現」を何度もリピートすることで徐々に明確化しようと試みるのだ。そこで、哲学論の対処法はやや極論すればただ一つ、

- リピートを徹底的に捕捉していく

これに尽きる。これを肝に銘じた上で各問を検討していく。

問2 問われているのは「自分のアイデンティティ(対他的な価値)」について。従って「自分のアイデンティティ(対他的な価値)」の同義・類義表現を押さえていくことで、これがどのようにして得られるのかも見えてくるはずである。

- ・ 自分のアイデンティティ(対他的な価値) (4行目)
- =
- ・ 「私」の価値 (5行目)
- ・ 価値というアイテム (8行目)
- ・ 「価値」(10～11行目)
- ・ 新しいアイテム (13行目)

そしてこれらがどのようにして得られるのかについては、同じく5～13行目に述べられている。

まず、「私」の価値を決めるのは「他者」である(5行目)とし、しかしそれは「直接他者を競争相手とする陣地取りゲームのようなものではない」と言う(9～10行目)。それは「社会の暗黙の合意」として与えられており、「他者」はそれを認定するも

のとして存在する（12行目）。そしてその認定を「私」が受け入れる以外に、その「新しいアイテム」（＝自分のアイデンティ）を得る方法はない（13～14行目）。

以上をまとめて解答とする。

問3 「他者による批判と裁定」とは、当然「可／不可」のいずれかとなる。すなわち「私」には『価値』がある／ない」の裁定である。この裁定の双方向性については、32～34行目で述べられている。

「私」がもっている長所や才能や愛らしさ ↓ 他者が愛する

「私」の短所 ↓ 愛されない

=

毀誉褒貶の原則

この苛酷な現実

これだけでは字数が余るだろう。直前の内容「自分が自分であるという理由だけで……愛されていた……時期を過ぎると」（29～30行目）を加えればよい。

問4 44～45行目に「さて、恋人の発見とそれにつづく『恋を得るためのゲーム』が、『アイデンティティゲーム』をはるかに圧倒する理由はここにあり」とあることには当然気付いただろう。それ以降の内容をまとめると次のようになる。

自己アイデンティティを獲得しようとする思春期以降の欲望

・「自分が自分であるという理由で他人から愛されたい」という欲望の挫折を打ち消すためのもの

同様の内容は28～29行目にも見られる。

「自己アイデンティティ」という新しい欲望の対象

・「他者からつねに愛されようとする」欲望の挫折によって見出される

一方、

恋愛／恋人の心を得ること

・この欲望（＝「自分が自分であるという理由で他人から愛されたい」という欲望）を・実・現・す・る・稀・有・な・可・能・性・を・も・た・ら・す
・「自分が自分であるという理由」だけで愛される純粋な可能性

これもまた同様の内容が17～21行目にも見られる。

恋人に受け入れられること

・アイデンティティゲームを飛び越えて最後の目標に達する
・さまざまな他者たちの批判や裁定を超えて「私」が至上の「よきもの」に適う存在であることの証明となる

以上をまとめればよい。

問5

傍線部④の直前に「要するに」とあることに注目。これは前の内容を簡潔にまとめる／言いかえる時に使う語であって、その意味で「つまり」「すなわち」といった同列の接続詞と同じ役割を果たす。よって傍線部④の言いかえ＝同義表現も「要するに」の前には書かれているはずである。まとめると、

「自己アイデンティティ」の欲望 ↓ 過酷な現実に対する二つの対抗策

- ① 「自分で自分を愛する」という方策
- ② 「どんな他人からも愛される」ような価値を自分の中に作り上げようとする

《要するに》

- ① 観念的なナルチシズム
- ② 「自分が他人から愛されるべき理由」を仮構する



会員番号	
------	--

氏名	
----	--